

家康と石舟斎

愛知学泉短期大学

教授 西尾 一知衛



ではあらためておはようございます。今日は松坂屋セール中にもかかわらずお越しいただきましてありがとうございます。今日は岡崎学の閉講式があるという事で、僕が最後のお話をさせていただくわけですけれども、岡崎というと、日本人がすぐ思い浮かべる人物というのが家康公だろうと思います。先程小山田先生が僕を紹介する中で触れましたけれども、私は柳生新陰流という武道を15年くらいやっています。柳生新陰流に石舟斎という人がいるんですけれども、この人が家康と非常に印象的な出会いをしています。その柳生新陰流というのは將軍の御指南役になるわけですけれども、このふたりが出会い、そしてすぐ共鳴しているんですね。家康は石舟斎の人柄、それから技の方も勿論ですけれども、それに深く感銘を受けていますし、石舟斎も家康の人柄というか、武将としての資質、そういうものに感銘を受けて5男の宗矩を徳川家に奉公させています。そういった事で、このふたりの人物がお互いに相手のどういう資質、あるいはどういう考え方に共鳴していったのかという、そういう事も僕なりにお話出来たらいいかなというふうに思います。

早速、お手元に資料としてお配りしたものがありますのでご覧ください。ここにざっと家康の略年譜という事で、石舟斎と出会うまでの家康がどういう人生を送ったか、どういう生き方をしたかという事を簡単に要点だけまとめておきました。それに沿って出会うまでをまずお話ししたいと思います。家康は1542年にここ岡崎城に生まれています。当時は戦国時代の真っ只中ですので、この三河岡崎の地は織田方、美濃・尾張を治めています織田方に攻められて、岡崎は孤立します。家康の父親の広忠ですけれども、駿府の方の、静岡の方の今川義元に援助を乞います。義元は援助するかわりに人質ですね、質子を差し出せというふうに言います。それで家康、当時は竹千代ですけれども、数えて6歳の家康を質子に送ろうとします。途中で織田方に奪われたりしますが、49年再び人質として義元の駿府に赴きます。同年広忠が24か25歳の若さで亡くなっています。この三河の国は再び主人がいなくなります。

岡崎では、広忠が亡くなり、そして竹千代が人質として駿府に送られていますので、今川から代官という形で家臣が派遣されてきます。番兵も派遣されてきます。そして所納を取るという事で、まあ竹千代が今川側に世話になっていますので、その費用というかそういったものとして年貢をごっそりと持っていきます。大久保彦左衛門の書きました『三河物語』から自由に引用させてもらいますけれども、そのせいで譜代衆、岡崎の「譜代衆の迷惑も是非なき次第」というわけで、非常にみんな困窮します。給料の方も十分に入らずに、「皆、鍬・鎌を持って田畑に出で」という、つまり武士でありますけれども鍬や鎌を持って野良仕事をしたという事ですね。「常々戦の先駆けに……」ともあって、今川側が戦をすればこの岡崎衆というのは先陣を任される、非常に戦の中でも危険なところに使われるという、そういった事を言っています。

1560年、有名な桶狭間の戦いで今川義元が戦死します。織田信長の奇襲攻撃に敗れます。まあ先程のところ竹千代、家康ですけれどもそれ程厚遇はされていないし、戦ともなれば毎度毎度先駆けという危ない部分を任されるという事で、不憫だといえれば不憫なんですけれども、ただこの桶狭間の戦いでいえば、それが逆に良かったというか。この戦い、織田信長との戦いの時でも、家康は19歳でしたけれども、大高城の兵糧入れとかさせられます。織田方の砦のすぐ前を通って大高城に兵糧を入れていきます。今川義元が大軍を連れて通りますので、もし大高城に寄るような時は沢山の兵糧が必要になります。それを大高城に運び込めという、そういった命令を受けて家康がそれをやります。あるいは丸根といった織田方の砦ですね、その攻撃を命じられたりしています。ここでも先駆けを仰せつかっているわけですけれども、考えてみますと逆にも今川義元に客分として大事にされて、まだ19歳で若いし、そんな危ない事する必要はないから自分の側にいろとか、そういったふうに言われたら、逆に信長の奇襲の巻き添えをくっていたかもしれないですね。先陣を任されて、危ない事を任されていた為に、この

信長の奇襲を免れたというふうにも考えられます。

この義元が討たれた時、19歳の家康という人のとった行動というのが非常に大胆剛毅というか、沈着というか、そして律儀ですね。彼は何をしたかという、岡崎に退却してきます。だけれども岡崎城には入らなかったですね。皆さんご存知のように、当時岡崎城には今川方の将兵がいましたので、家康は岡崎城には入らずに大樹寺に入っています。そこの大樹寺に入ったところを織田方の追っ手がきて、大樹寺の住職が門を振り回して追っ払ったというような、そういった話も残っていますが、それはその時の事です。その大樹寺に引き上げて、今川方の将兵が岡崎城を退いた、それを確認してから岡崎城に入っています。三河物語に「捨て城ならば拾わん」という、今川方が捨てた城なら自分が拾おうという事を言って入ったといいますけれども、これも非常に周到な考えというか、そして律儀さというか、そういうものが伝わってきます。今川方の将兵がいるんだったら岡崎城には入らない。大樹寺に入る。今川方の将兵が退いてから岡崎城に入る。それからですね、織田方は戦を仕掛けてくるわけですが、家康は今川の地、駿府に逃げ帰りもせず、この岡崎の城に留まって、そしてそこに書いておきましたけれども、拳母とか梅坪とか沓掛とか、そういった織田方の城砦を攻めています。これは三上参次という明治時代の歴史家ですけれども、彼が江戸時代の非常に詳しい歴史を書いているんですけれども、彼の評論として元康、家康の事ですね、「深沈にして大度あり。最も堅忍不拔の念に富む」というふうに、三上参次も褒めちぎっています。降参もしなければ今川方に逃げ帰りもせずに堂々と織田方と渡り合うわけですね。その結果として1562年、2年後ですけれども、信長が家康と同盟を結びます。信長が若い家康を同盟に足る武将というふうに認めて家康と、元康とその頃は名乗ってましたけれども、同盟を結びました。

この信長と家康の同盟というのは、本当にその後の日本の歴史をみると大きな意味を持ったと思います。当時の狂歌ですけれども、「織田がつき、羽柴がこねし天下餅座りしままに食うは徳川」という狂歌があります。信長がついて羽柴秀吉がこねた餅を側に座っていた家康が取って食べたというような、そういった事ですけれどもとんでもないですね。信長が日本の天下統一の基礎を敷きましたけれども、この家康との同盟というのは非常に大きかったと思います。例えば当時、名将として知られた武田信玄がいます。この人も十分に天下を狙える武将でしたけれども、武田信玄の背後に誰がいたかという上

杉謙信がいました。この上杉謙信という人は色々な書かれた物を読んでみると本当に純粹培養の戦国武将というか、そういう感じのする人です。戦国時代に武将と生まれたからには良き敵と、好敵手と戦場で一戦交えるというのが武将の本懐みたいな、その武将冥利に尽きるというようなそういう風に考えた人のように思われます。言ってみれば、野球でいうと長嶋茂雄みたいな人ですね。とにかくゲームの中で村山とか金田とか、そういう良い敵と対戦するのが嬉しくてしょうがないという。そういったような感じを抱かせる人です。だから謙信にとってみるとすぐ近くに武田信玄という、もう相手にとって不足なしという名将がいます。その信玄が兵を動かそうとすると、天下一統の思いを抱いて兵を動かそうとすると、すぐ謙信がくるんですね。ふたりの戦いは川中島の戦いというのが有名ですが、この川中島の戦いというのは通説によりますと5回ぐらい戦っています。だから信玄が兵を動かそうとするとすぐ謙信が「良き敵ござんなれ」とか言って出てくるんですね。信玄は非常に上杉謙信、そういう人ですけれども戦は上手ですので、その上杉謙信に悩まされています。謙信も強い武将でしたけれども、この人にも例え参謀として家老か何かに政治的な考え方とかですね、そういった知恵を授ける人がいたら、この人ももっと大きな武将になったと思いますけれども、この参謀が皆さん「天地人」で御存知の直江兼続ですね。この人も主君の謙信と同じような、双子かというぐらい似た人でしたので、勢力的には上杉謙信というのは大きく伸びなかったですけれども、ただ武田信玄にとっては非常に困らされた相手です。だからその京に向かおう、畿内を治めようという事で兵を動かそうとしても、常に背後が気になるという、そういった関係でした。

そういった武田信玄の置かれた状況と比べてみますと、信長がここで家康と結んだというのは大きいです。若いけれども沈着冷静で剛胆である。そして同盟とかいう事に対しては非常に律儀ですね。今川ともなかなか関係を絶って織田方に向かうという事はしませんでした。そういう同盟に対して律儀な人が、信長の背後に控えているわけです。もうこれで信長は当時背後といえば武田信玄もいるし、それから北条もいるし、大変な武将達が揃っていましたが、家康と同盟したという事で、美濃・尾張から、自分の背後は家康に任せて、自分は畿内とか京とかに上れるという、それを可能にしています。だから信玄と謙信と比べてみれば、家康を同盟者として信長が得たという事は非常に大きかったと思います。同盟を結んで、次ですけれども、63年義元の

元の字を返して家康とあらためる。この年に三河一向一揆が起こっていますが、この一揆も鎮定して次の年のうちに東三河ですね、今でいう東三河の方を平定していきます。そして三河全体を自分の支配下に治めました。66年、家康は徳川氏を称する。松平から徳川というふうに名前を変えます。なぜ徳川に変えたのかというのははっきりとこうだとはいえないんですけれども、元々が祖先を尋ねていくと上野地方の新田氏の系列ですね。新田氏の所領の中に得川というそういった地名のところがああります。まあそれを取ったのではないかといわれています。従五位下に叙せられて三河守に任ぜられます。

67年信玄が動き始めますね。信玄は駿河に入ります。今川氏は落日のように勢力衰えていますので、信玄が駿河に入り、家康は遠江の方ですね。駿河・遠江というのは静岡の大井川を境にわけます。大井川の東が駿河、西が遠江になります。ここで信玄が家康と大井川を境にして東は自分がとるから家康の方は西をとりなさいというふうに、そういう約定を結んだといわれています。70年、家康は岡崎城から浜松城に移ります。生まれた城の岡崎城に1560年に入りましたね。それから10年で浜松城に移ります。岡崎の皆さん方にすれば、そのままずっと岡崎にいて天下統一に向かって欲しかったと思われるかもしれませんが、これは三河から西を見ると、美濃・尾張という事で、これは信長の領土です。家康が戦国武将として自分の勢力を伸ばそうと思ったら東に行くしかないですね。東に行くとなると武田信玄とかがいます。だからどうしても東の方で信玄の勢力とぶつかりますから、西三河の岡崎よりも浜松、遠江の浜松にいた方が前線に近いわけですね。1番敵と対峙する、その重要性の高い前線に近いところに移ります。それが浜松城という事になります。これより東に移ってしまうと、実はもう1本天竜川がありますね。天竜川を越えないといけませんね。そうすると天竜川という大きな川を越えてもって遠江の東の方へ移ろうとすると、今度は逆に信玄に攻められて応援が必要になった時、当然信長に応援を求めなければいけませんので、素早く応援にこられるかどうかかわからない。天竜川の水の流れとかですね、水の量とか色んな事がありますから。という事で、浜松城、引間というのがその当時家康がいる城としては1番地の利を得ていたという事になります。

71年、翌年にはやはり信玄とぶつかりました。これで家康は大敗を被ります。この時は信玄というのは3万といわれる大軍を率いて西に動きます。甲

州からまず遠江の方に下りてきて、そこから西に向かおうとします。かなりの決意を持って軍を動かしてきていると思いますけれども、この三方ヶ原の戦いも月でいいますと12月です。旧暦ですから新暦でいうとちょうど今頃ですね。その冬の最中という事になります。どうして3万という大軍を動かすのに冬という、まあその軍隊を動かすには大変な季節ですね。そういった季節に動かしたのかという、やはりこれも先程お話ししました純粹培養の戦国武将の上杉謙信の事があると思います。上杉謙信は越後ですから、越後の武将ですから冬の最中という、今の新潟にあたりますから雪が深いです。雪が深いと謙信は大軍を動かす事が出来ません。だから雪が深い間は信玄が大軍を動かしたからといって、じゃあという事でかかってくるわけにはいきませんので。だからこの辺の事情をみると、信玄が本当に可哀想だなという気がします。これだけ謙信に悩まされて、多分信玄にしてみれば5回も川中島で相手してやったんだからもういいじゃないかというふうに謙信に言いたかったろうと思います。この時に信玄が浜松の城下を通ろうとします。信玄にしてみれば3万です。当時その浜松には家康方の軍勢というのは4、5千しかいなかったといわれています。だから勝負にならないわけですね。普通こういう時は籠城します。籠城してどうぞお通りくださいという。信玄の目的は西に向かう事ですから、畿内・京に向かう事ですから、どうぞお通りくださいというふうに籠城してしまうんですけれども。実際、この時は信長もそうやって勧めています、籠城してやり過ごせという。だけれども家康はやり過ごさなかったです。戦国大名で三河守で、自分のお膝元を堂々と敵の軍勢に通られて、それで黙っている事なんか出来るかといって討って出ます。

三方ヶ原で戦うわけですがけれども散々に討ち負かされます。ただこの時に討ち負かされて浜松城に帰ってくるんですけれども、その時の家康の行動も立派でした。城門を閉ざさなかった。自分が入り込んでしまえば追っ手を防ぐ為に城門を閉ざすんですけれども、城門を閉ざさなかったです。まだ帰ってくる将兵がいるという事で城門を閉ざさなかった。この時は本当に家康も命からがらというか、鎧が血に真っ赤に染まっていたというふうに書かれていますけれども、非常に危ない戦でした。また、大久保彦左衛門が『三河物語』で書いていますけれども、大久保彦左衛門が家康と一緒に戦って、家康の側で家康の身辺を守る役目なんですけれども、その負けて引き上げて行く時、浜松城に引き帰って行く時にみるみる家康の馬に離された、あっという間に数百

メートル、家康の馬に遅れたというふうに書いています。家康は武術も、つまり馬術や弓術、剣術も、それから砲術、鉄砲の方ですね、そういったものも非常に熱心に学んだ人です。だから、馬術の方も大久保彦左衛門があつという間に引き離されちゃうような、そういった優れた馬の乗り手でした。帰ってからも城門を開けておく。それから大久保忠世に命じて、鉄砲100丁を持って武田方に夜襲をかけたかっています。大敗をくらったけれどもまいったとは言わないんですね。主君がこういうふうに、負けたけれども戦う意欲満々ですので、主君がこういった態度を持ち続ける限り「勇将の下に弱卒なし」というか、それで兵隊達の意気も衰えないです。大久保忠世が鉄砲100丁持って夜襲をかけたという事がそれを表しています。信玄が言った言葉として「とにかく勝ちても恐き敵なり」、その勝った事は勝ったけれども恐い敵だと書かれています。信玄の下有名な武将ですけれども、馬場信房も「三河武士の屍、此方に向かいたるは皆うつ伏し、浜松方へのは皆のけざまなり」と報告したというふうに書かれています。自分に向かってくる方の、武田方に向かってくる方の武士はうつ伏せ、浜松の方へは仰向けというのは、絶対三河武士というのは敵に背を向けないんだという、そういった事ですね。浜松の方へ退いていく場合でも、敵に向かいながら退いていくんですね。回れ右して逃げ帰るわけではないという事で、そういったふうに馬場信房が信玄に述べたという事が書き残されています。

桶狭間の時もそうですけれども、この三方ヶ原もそうです。家康と石舟齋の出会いの時に、家康は石舟齋に柳生新陰流の奥義ですね、柳生新陰流の剣術の考え方というのを講義させていますけれども、家康の対処の仕方を見ていると、それが何かという事は言えませんけれども、自分なりの行動の原理というか、そういったものを持っているというのがわかると思います。自分なりの原理を持っていて、それで筋を通していくという。今川義元が討たれてもすぐ織田方に降伏したりとか、織田方の味方についたりとか、そういった事はしなかったですね。それからこの三方ヶ原でも、相手が武田信玄であっても、圧倒的に数の上では不利であっても、自分の領土を堂々と通られてたまるかという事で、打ちかかっています。俗にいう時勢を見るのが上手で、勝ち馬に乗るとか、世の流れを見てその流れる方向に向かうとか、あるいは風の吹く方に並びとかですね、そういった事は絶対してないですね。自分なりの考えがあって、自分なりの筋を通して行動しています。

実は石舟齋が新陰流の奥義というのを書き残して

いますけれども、そこでも何が大事かという、今の言葉で言いますと主体性というか、それが1番大事だという。相手の動きに連れて動くのじゃない、自分の考えるように相手を動かすんだと、そういった事を言われました。現代では主体性と言いますが、そういったところでもふたりは似ていると思います。これまた後でお話出来ればと思います。

1582年、本能寺の変で信長が明智光秀に殺されます。その時家康は堺にいました。大阪の堺にいました。同盟の信長が殺されたという事で、家康は堺にいて自分の家来に厚く守られていたわけではありませぬので、そこから脱出します。それが有名な伊賀越えですね。当時は落ちていくというか、難を逃れて逃げていく武将というのは落ち武者狩りとかですね、そういった目にあいますので、この時も非常に危なかったといわれています。後に、これは『徳川実紀』ですけれども、東照公第一の難儀というふうにいわれるぐらい、家康が1番危なかった時と言っています。自分を守ってくれる三河武士もいなくてという。伊勢の白子から船で帰っています。それから1583年、信長が殺されてからですけれども、秀吉が後継者に名乗り出ます。秀吉は当時は中国攻めをしていましたけれども、すぐ帰ってきて明智光秀を倒します。そして信長の後継者として現れて、それに不満を抱く柴田勝家であるとか、織田信雄であるとか、こういった人々を除いていきます。秀吉が織田信雄にまで手を伸ばそうとした時に、家康が信雄方につきます。小牧・長久手の戦いで秀吉と戦って、家康の方が勝っています。秀吉は非常に残念無念という戦になりましたけれども、これも三上さんの言葉ですけれども、義理を名として一快戦をなしている。つまり織田信長と同盟関係というか、信長の方が上でしたけれども、そういう関係に家康はあったわけで、その信長が倒れて、信長の息子達までですね、後継者の秀吉が討とうとした時に、同盟者であった信長の息子の信雄側について、破竹の勢いであった羽柴秀吉と一戦を交えたわけです。これが「義理を名として一快戦をなし、秀吉のかの山崎におけるがごとくし、もって地歩をしむ」ということです。これで家康は、信長亡き後の秀吉の天下になりつつある時に、徳川家康ありという存在感を示します。だからこの時も家康なりの筋を通していきます。主体性を持って行動をしています。

だから家康という人は信長とも戦っているし、それから武田信玄とも戦っているし、それから羽柴秀吉とも戦うという、当時勢いのあった人達とほとんど戦をしています。こういった事をしますから、秀吉も家康に一目を置かざるを得ない。秀吉は家康懐

柔にかかります。しきりに上洛を促します。京都にこいという。だけれども家康はなかなか行かないです。秀吉の事だから何かあるだろう、京都にこさせといて、討ち果たされたのでは適わないという事で、なかなか動かないです。だけれども秀吉は家康と同盟を成す為に、和睦をしますけれどもそれを確実なものとする為に、自分の妹の朝日姫を家康に嫁がせています。それから自分の母親を人質として送っています。そこまでしますので、家康も上洛をする気持ちになります。家来達が物凄く心配していますけれども。それで人質の秀吉の母親が駿府に着いてから出発するのではあまりに秀吉に対して無礼だという事で、ほぼ同時にそれぞれ家康は京都に向かい、秀吉の母親は駿府に向かいという事で、その途中のここ岡崎ですね、岡崎で秀吉の母を留めておいて家康は上洛して秀吉と会見します。

1590年、北条氏が滅亡します。この時に秀吉は家康を関東に移封します。この家康の関東移封ですけれども、この時も家臣達は大反対しましたね。当時の家康は甲州それから信州それから駿河、遠江、三河と5つの国も併せていますから、秀吉は自分のいる京都、大阪、畿内に近いところに家康という大実力者がいるのは気がかりだから関東に移すだろうという事で反対します。けれども、ここでも家康は泰然自若としていましたね。関東百万石です。百万石あったら数万の軍隊を動かせる、数万の軍勢を動かせる以上何の心配もいらないという事で、泰然自若としていたそうです。関東に移りました。91年秀吉の朝鮮征討ですね、それが発令されて92年に文禄の役が起きます。これは朝鮮だけではなくて、秀吉は当時の中国、明ですけれども、明朝の中国まで視野に入れていたという事で、誇大妄想、年をとって秀吉も誇大妄想的な傾向が出てきたんじゃないかとかいわれますけれども、別にちょっとその前を見れば、13世紀には蒙古のチンギスハンが西アジア、中央アジア、それから南ヨーロッパを征服し、帰ってきて孫が中国を支配して、ほぼ世界の半分くらいを制圧していますので、別に秀吉がそういう野望を抱いたからといって、ちょっと晩年になっておかしくなったんじゃないかとか、そういった事はいえないと思います。93年秀頼が生まれます。朝鮮戦役の和議が成立します。翌年、家康はまだ秀吉と一緒に京都にいますけれども、その年というのは朝鮮戦役も終わってのんびりと出来た、骨休めの出来た1年だったといわれています。秀吉もお茶会とかですね、そういったものを盛んに開いていたようです。この年に家康が京都鷹ヶ峯に柳生の里から石舟斎を招いて新陰流の奥義を聞くという事をやってい

ます。

次に柳生石舟斎と新陰流という事で少しお話をしていきたいと思います。この新陰流というのは流祖は上泉伊勢守と言います。この人は兵法の大成者というか、天才的な兵法者でした。この人の立てた新陰流にしても、こうすれば勝てるという、その術理ですね、そういったものを明らかにしています。こうすれば絶対に勝てるという。そういった事を今まで言い出した兵法・流派というのはなかったです。諸流を究明して新陰流を立てました。相手の動きを引き出し、それに縦横に応じて勝ちを制する。いわゆる転(まろばし)と言いますが、転(まろばし)の剣というのを極意とします。ここでも相手の動きを引き出しているんですね。だから相手に先に打たせようとするので、よく誘うとか誘いとかが言いますが、新陰流は誘うって事は言わないですね。迎えると言っています。相手を迎えるんだという。相手は自分の方から打ち出したと思ってるかもしれないけれども、こちらの方からすれば、こちらが迎えて相手に打たせた。相手から引き出した動き、それに対して縦横に応じます。これを転(まろばし)と呼んだんですけれども、それを極意とする新陰流を打ち立てました。1563年上洛の途中で宗厳、当時35歳と立ち会います。石舟斎は当時、柳生宗厳といいます。伊勢守が上洛したのも自分の兵法を將軍に上覧に入れたいという、そういった目的を持っていました。この時に高名な上泉伊勢守がくるという事で、宗厳とそれから友達でこちらは鎗の方ですけれども、宝蔵院流の胤栄、彼らが上泉伊勢守を招待します。宝蔵院で立ち会いをお願いします。宗厳は3度立ち会って3度とも手もなく負けました。手もなく負けたんですけれども、当時宗厳というのは畿内で1番強いという評判を手にしてた武者者です。だけれどもその畿内一と言われた使い手が手もなくやられるんですね。上泉伊勢守に手もなくそうやられて、おかしいおかしいと考えながらもう一度と言って、その次の日に立ち会ってもまた簡単にやられる。更に考えて3日目にもう一度と言って立ち会ってもまた簡単に勝ちを取られるという事で、ここからが宗厳らしいところなんですけれども、かなわなくなると畿内一とかそういった誇りとか評判とか、そんなものは打ち捨てまして、直ちに入門を乞います。

伊勢守も本当は京都に行って將軍に自分の剣術を上覧に入れるという目的があるんですけれども、その宗厳の懇望に負けまして柳生の庄に立ち寄ります。これから半年の間、宗厳は稽古三昧の日を送ります。朝から稽古をつけてもらって、時には自分が

納得いかなない時があると、ずっと稽古を続けて三更に至るといような、三更というのは今でいうと真夜中の12時過ぎですね。そのくらいまで道場に蠟燭をかけてですね稽古三昧。それが終わってからも宗巖はその日に自分が学んだ事とか、教えられた事とか、考えついた事とか、そういった事を稽古の後で書き残しています。そういう稽古三昧の日を送りました。柳生の庄を去るにあたって伊勢守は宗巖に無刀取りの工夫をするようにと言いきまします。その無刀取りというのは敵が太刀を持っている、こちらは無刀である、空手である。そういう時にどう勝ちを制するか、あるいは切られない工夫をするか、それを考えてみるという宿題を与えて自分は京都にきました。翌年帰りの途中で柳生の庄にまた伊勢守が立ち寄ります。この時に宗巖は自分の工夫した無刀取りの術技を示して、伊勢守から誉められます。そして一国一人という新陰流の印可状を受けました。新陰流でいうと、ですから流祖、第一世というのが上泉伊勢守になります。第二世が石舟齋宗巖になります。彼はずっと柳生の庄にいて、門弟達の稽古にあたるわけですが、1594年家康から招待を受けます。石舟齋当時66歳です。家康は当時53歳です。召されて京都に行ってそこで新陰流の奥義を講じます。この時に家康の求めに応じて5男宗矩、当時24歳を相手に無刀取りを開示します。これに感嘆した家康は自ら木太刀を取って石舟齋に立ち向かいましたが、その無刀取りの技で木太刀を飛ばされ、胸を突かれて仰向けに倒れそうになったというふうに言われています。

家康という人は先程も触れましたけれども、色んな武術に対して嗜みの深い人です。そういう家康の武術への嗜みの深さというか、そういった事を述べている逸話というか、そういったものが色んな本に沢山残されています。出陣の前には家康という人は太刀を振るってから出かけたとか。奥三河の奥平という若武者でしたけれども、戦で手柄を立てて、若くてまだ非力な若者であるのによく手柄を立てたと言って家康が誉めた時に、「剣術は力ではなくて技です」とその若者が述べて、それを聞いた家康が、お前は誰に剣を習ったと訊ね、「奥山流を習いました」と答えたら、「ああ休賀齋か。自分も若い時、その人について習った」と語ったとかですね。家康の武術に関する嗜みの深さというのは本当の事だろうと思います。実際、海道一の弓取りというふうに呼ばれていました。その弓も馬術もそれから砲術も剣術も、若い頃からずっと嗜んでいました。

家康は即刻神文誓紙を石舟齋にあてて、新陰流を信篤するに至ります。こうして新陰流が將軍家の御

流儀というふうになる端緒が開かれたわけです。ふたりが出会いまして、すぐに家康が、石舟齋の技もそうですけれども人物というか、そういったものに感銘を受けて自分に奉公するように言いますけれども、石舟齋は年齢を理由に自分は出仕せずに息子の宗矩を送ります。家康と石舟齋のふたりが出会って、最初の出会いで共鳴し合うというか、お互いに相手を認め合うわけですが、当時の事ですから詳しく正確な事というのは勿論わかりませんが、ふたりの言動とかを見ていくと、ああ似ているところがあるなという、そういったものを感じます。資料の下にそれを挙げておきました。

家康という人は非常に忍耐力のある、そして思慮が周密で沈着な人であった。忍耐をするんだけれども、それは決して屈服ではない、屈服にあらざる忍耐。それから周密な考え方ですね。それからその大度、大きな度量、それから沈着冷静さという、そういった性格を備えた人だと思います。戦国大名でしかも勢力盛んな武将でありながら、家康の成功の特徴というか、それは非常にこの人には学ぶ姿勢というものがある、学ぶ姿勢をしっかりと持っていた人ということです。これは三上参次という人の書かれた物から取ったものですが、「武術の事は言うに及ばず、文事にも不断心を注ぎ、漢学のみならず国学、仏学のいずれにもその聴聞を飽かず。」これは例えば秀吉と比べてみると、「秀吉はただ学僧を集めて」その講書、書物を講義するんですけど、「その講書を聞くに留まるのみ」で、「家康のその聞くは勿論」、講義も聞くけれども「自身にも読書し研鑽せしには比すべくもあらず」と言っています。家康という人は非常に学問好きの人でした。武芸にも執心した人ですが、学問好きの人でした。尾張には家康の晩年の子ですが、義直ですか、尾張の第一代の藩主としてきていますが、この人も家康に似て非常に武芸に対する嗜みの深い人でした。

実は柳生には尾張柳生と江戸柳生があるんですけど、江戸柳生というのは將軍家指南役として入った宗矩ですね。その宗矩の系統を言います。尾張柳生というのが実はその柳生の正統というか、道統を継いだ流派です。この尾張柳生は第一世は上泉伊勢守ですが、第二世が石舟齋ですね、宗巖です。第三世に宗巖が1番愛した、素質も勿論ですが、人物・資質も自分に1番近いという事で、もう小さい時から手塩にかけた孫の兵庫助がいます。柳生兵庫助利巖といいますが、この人が第三世に入ります。第四世が実はこの初代の尾張藩主の義直です。この義直の後の五世が有名な柳生連

也齋です。小さい時から柳生の麒麟児と言われて、剣の天才と言われた人ですけれども。この人が第五世で、その次の第六世が、尾張二代藩主光友になっています。だから現在柳生流は第二十二世の方が会を司っていらっしゃるけれども、この二十二人の宗家のうち7、8人は尾張藩主なんです。尾張藩主の中で熱心に兵法を学んで、あるレベルに達した人というのも宗家として迎えています。そういった事をやって、この初代尾張藩主なんですけれども、彼はこちらにくる時に、尾張にくる時に、父家康から非常に沢山の書物を貰ってきています。家康はこの義直に自分が学んだ多くの書物を与えて尾張に送ったという事です。彼はその書物も読んで色々な自分の書いた物とかですね、あるいは本の出版とかをやりました。家康もやりました。家康も仏教の典籍の出版とかですね、そういった事に力を注いだ大名です、将軍ですけれども。この初代の尾張藩主もそうでした。武芸にも秀でていましたけれども、学問の好きな人でした。父家康に与えられた書物を学んで、自分なりの書いた物を残して、あるいはその書物の出版もしてという、そういった事をやった人です。第二代藩主の光友もそうでしたね。この人は非常に体格に恵まれた藩主だったという事が残っています。生母が土地の女性で、非常に体格の立派な女性だったらいいです。彼も非常に武芸を好んで稽古をして宗家になっていますけれども、この人も書画に巧みな人であったといいます。書とか絵とかそういった物に非常に巧みな人で、文芸・学問の方にも力を入れた人だと。こういった事を見ていると家康の学問好き、家康の勉強好きというのは、その子どもの行動を見ていると本当だったんだろうなと思います。

最も愛読せしは吾妻鑑なりといわれていて、吾妻鑑を常に座右に置いてですね、愛読していたというふうに言われています。例えば家康という真言宗の天海僧正とかですね、そういった人が身近にいて、常に家康の相談役になっていたという事も言われていますし、それから朱子学を講じた林羅山ですね。林家ですけれども、林羅山も家康が引っ張り上げた人です。彼は実は儒学の中では異端と言われていた人で、若い時に当時の儒学の学問のあり方に非常に不満を抱いて、それを激しい調子で批判する。そういった事をやっていました。それで当時の儒学の中では異端と見られて、そして排斥されかけたんですけれども、その若き林羅山の言ってる事を聞いて、家康がおもしろい奴だという事で、林羅山を取り上げています。学問にも造詣の深い人でした。

一方、石舟齋宗巖も小兒から兵法、兵術に志厚

かったのみならず、老儒の教えを受け、しばしば高野山に入って真言の教えを修め、また禅に参じた。戦国の一豪族としては稀にみる篤信深修であったといわれます。石舟齋も兵法執心の人でしたけれども、その他にも老儒、老荘の書籍とか儒学であるとか、あるいは仏教であるとか、そういったものを学んだ人です。ですから書き残した物が沢山ありますね。沢山という程ではないんですけれども、上泉伊勢守もそうでした。上泉伊勢守も小さい時はお寺に預けられたか何かして、そこで勉強をしています。深く学んで口伝書等も書き残して石舟齋に与えています。今度は石舟齋が自分の工夫を書き残します。これは後から柳生家家憲という事で読んでみますけれど、その文章を読んでも石舟齋という人が非常に筆の立つ人、自分の思いを的確に文章に残せる人という、剣術だけの人ではないという事がよくわかる、そういった物を書き残しています。それから兵法百首とって、兵法に関する心構えとかですね、そういったものを歌に詠んで残しています。この石舟齋が可愛がった、自分の再生だといって可愛がった、自分の再来だといって可愛がった孫の兵庫助ですね。この人も書き残しています。この人も自分一代の稽古・工夫で自分が得たものを書き残しています。実は、こういう物、京都に行った時に家康が石舟齋に渡した神文誓紙とかですね、そういったものを含めて全部残っているんですね。尾張柳生の方には全部残っていて、それが代々伝えられてきました。

今でも僕ら聞くんですけれども、2年前に亡くなられた方が柳生延春先生という方なんですけれども、彼のお父さんが名古屋にいて、丁度戦争中でした。空襲が激しくなってきた時、彼のお父さんは行李の中に、柳行李ですね、背中に背負う行李の中に代々伝えられてきた口伝書とかですね、そういったものを全部詰めて、空襲警報が鳴ると真っ先にそれを背負って防空壕に飛び込んだというふうにお聞きしました。これはある意味、普通の人から見ると、まあ事情を知らない人は、みっともないと思うかもしれません。武道の先生、しかも柳生の正統の第二十世の宗家ですね。でありながら、警報が鳴ると真っ先に防空壕に飛び込むという事で、知らない人から見ればみっともない行いだったというふうにするかもしれません。けれども、その巖長先生と言いますけれども、その柳生巖長先生にしてみれば、400年間にわたって代々伝えられた物を自分の代で絶やすわけにはいかないという、その思いだけだったというふうに言われたそうです。空襲にあつて、代々400年間伝えられた物を自分の代で失うわけにはいかないという、そういった思いで周りがどう受

け取ろうが、警報が鳴れば真っ先にそれを抱えて防空壕に飛び込むという、そういったふうになされていたそうです。こういった学ぶ姿勢というのが家康と柳生に共通します。学ぶという事はやはり自分を知るといこと、それとあと謙譲の精神ですね、そういったものがなければ学ぶという姿勢にはならないと思います。

この学ぶ姿勢が共通して、さらに先程言いましたが家康の行動を見てみると主体性があります。流されない、時流に流されない、時勢に流されないという、そういった主体性を持っています。この主体性という事が、石舟齋は主体性という言葉を使いませんでしたけれども、主体性という事が柳生の剣の術技の上においては大切な事です。相手の動きに合わせるんじゃなくて、自分の思うように相手を動かすという。これを活人剣(かつにんけん)と言います。活人といって人を活かしているんですね。柳生では活人剣と言います。これに対するものを殺人刀(せつにんとう)と言いまして、殺人というの人は人を殺す、殺人と書きます。人を殺す刀と書いて、殺人刀というんですけれども、殺人刀というのは構えて相手を圧倒して、相手を自由に動かさないようにして勝ちを制するというものです。柳生は違うという。活人剣と言います。相手を動かして、相手の動きを引き出して、相手にこちらの迎えに対してですね、相手の動きを引き出して、相手に使わせながらこちらが勝ちを制するという事で、こういった事を現代の言葉で言えば主体性になります。だからこういった事も家康はきっと感じたんだろうなと思います。自分が取ってきた行動の原理みたいなものですね、主体的に動くという。石舟齋を呼んで柳生新陰流の奥義について講義をさせて聞いたたら、石舟齋の言ってる事も自分という主体があって、相手を自由に動かして、こちらはそれに応じて勝つというという事で、きっと共感するところがあったんだろうなと思います。

それから学ぶ姿勢ですね。この学ぶ姿勢というのが、その1番下になりますけれども、石舟齋が書いた当流家憲という物で、柳生家代々に伝わってきた石舟齋の言い置いた物ですね。読んでみますと、「造次顛沛そうじてんぱいにもこれを嗜み、」造次顛沛というのは僅かの間という事ですね。その僅かの間においてもこの兵法、それを嗜んで切磋琢磨する、僅かな時間も活かしてという事です。「志、兵法に執心せしめ、道を深く相尋ぬべきなり。嘆きても嘆かわしきは奥義に疎き仕合だて、その身の恥辱かくのみならず云々」とあります。1番嘆かわしいのはこの新陰

流の奥義も知らずに、他流とかですね、そういったものに試合を挑んでいく。その試合に挑んでやれ勝ったとかですね、そういった事でいい気になったりとか、そういった「仕合だて」。これは敗ればその身の恥辱をかくだけですし、「兵法一流の師に難をきする事、誠に誠に不覚の次第なり」という。兵法一流の師、だから色んな流派がありますね。その色んな流派のその師です。その人を非難したりとか、この流派はこうこうこうで駄目だとか、うちの流派の方が優れているとか、そういうことですね。そういった非難をしてる事、これは誠に誠に不覚の次第だという。「兵法一儀にあらず、いずれの芸能か稽古なくして上手のあるべきや。」兵法というのは、これだけが本当の兵法とか、そういったふうには、唯一これというふうに決まったものではないんだという。「いずれの芸能か、」ここで芸能といっていますけれども、昔は兵法も芸能のひとつというふうには考えられていました。鎗とかもそうですし、弓もそう、あるいは馬術もそうです。水泳もそうです。「稽古なくして上手のあるべきや。」どんな芸能、あるいはどんな流派にあってもですね、稽古なくして優れているといったような、そういったことがあるはずがないという。何が言いたいかというと、そういうふうにならざるにそれぞれの芸能、それぞれの流派で必死な鍛錬、稽古を積んでそして流派を立てたんだから、そこにむやみに試合を挑んでですね、やれ勝った負けただけじゃなくて、学べと言っているんですね。その流派が積んできた鍛錬、稽古の中で打ち立てたもの、掴んだもの、そういったものを学べというふうには、そういったふうには石舟齋は言っています。「この流れには、」柳生新陰流ですね、「この流れには第一に仕合為すべき事無用なり。」第一に、試合をする、他流と試合をするという事は必要ないというふうに言っています。「その仔細は幾重にも他流を育て、相尋ぬべき事もつと尤もなり。」他流があれば、その他流の繁栄というか、それを願ってあるいはそれを手助けして、そしてお互いに勉強し合えばいいという。「相尋ぬべき事もつと尤もなり」というのはそういう事です。うちの流派だけがうちの流派だけがとか、そんなつまらぬ事を考えるなというんですね。「一文は無文の師。」もしひとつの文を知っている人がいて、自分が無文、ひとつの文も知らなかったら、ひとつの文を知っている人は自分の先生になれるんだという。その人からそれを学べばいいという。一文は無文の師というのはそういう事です。それからこれは我々が普段いつも言われる事ですけども、「他流に勝つべきにあらず、昨日の我に今日は勝つべし」という。我々兵法を嗜むものは、他流に勝つ事が目

的じゃなくて、あるいは自己の同じ流派の中でもある人に勝とうとか、そういった事が問題じゃないんだという。「昨日の我に今日は勝つべし」というのは、勝つ相手は昨日の自分だということです。毎日毎日懸命の稽古を積んで、昨日の自分と今日の自分が戦ったら、今日の自分が勝つという、そういうふうに鍛錬していくのが本当の稽古なんだと。だから勝つ相手は他の人間、あるいは他の流派の人間ではなくて、昨日の自分なんだと言っています。この「昨日の我に今日は勝つべし」というのが柳生家の家憲になっています。

色々な事を家康と石舟斎にまつわる事でお話ししましたが、今日が今回の岡崎学の最終回という事で、最後に僕の考える岡崎学の可能性という事を簡単にお話して今回の話を終わらせていただきたいと思います。まず、1番目に郷土史、民俗学としての岡崎学があると思います。これは日本史全体としての日本史とか、日本民俗学のその一部、その細部詳説としての岡崎学というあり方があると思います。代表的なものは岡崎市史ですね。非常に詳細にわたって調べられ記録されています。それからふたつめに、これはあまり岡崎では当てはまらないかと思うんですけども、日本の歴史とか社会・文化、またはその一般的な理解解釈に対して、根源的な批判や反措定を対置するような岡崎学。例えば有名な荒畑寒村の『谷中村滅亡史』という本があります。これは日本最初の公害事件といわれた「足尾銅山」ですね、そこでその下流にあった、その銅山から流れた害毒で下流にあった谷中村が滅亡していったという。これを読むと当時の明治政府、よく明治時代の政治家という、今の政治家と比べて本当に国家の事を考えて政治家らしかったとか、それに比べて今の政治家はとか言われますけれども、この谷中村の滅亡の様子が書かれた物なんかを読みますと、如何に当時のいわゆる大政治家と言われている人達が、富国強兵ですね、国家を第一の目的として、その為に普通の国民、特にその弱い立場、貧しい立場の国民ですけれども、如何に彼らの生活や権利を踏みにじっていったか。虫けらのごとくという言葉がそのままびったりくるような、そういう踏みにじり方をしています。こういったもので通説に違う光を当てるといえるか、そういった事も出来ると思います。それから3つ目、これは今岡崎市がやろうとしていることだと思いますけれども、あるべき都市環境、社会、経済、文化、生活環境を作り上げて、その理念とかノウハウとかを発信していくような、そういった岡崎学もあると思います。岡崎に似たところで郡上八幡というのがあって、ここも城下町ですけど

も、ここは水という、郡上の綺麗な水という、その水をテーマにしてまちづくりをして、そして成功させたところですよ。岡崎も今一生懸命に地方の文化都市、東京とか大阪とかの大都市の後を追うんじゃないかと、地方の文化都市として岡崎独自の自然とか歴史とか産業とか、そういったものに繋がりのあるまちづくりをしていこうとしているという、その姿勢がよく伺われます。例えば「りぶら」もそうですし、あるいはジャズというものをサポートしていこうという、そういった姿勢もそうですし、あるいは伊賀川の流域に散策の道とかですね、そういったものをつけたりしている。これも東京、大阪といった大都市のその後を追ってリトル東京とかいうのを作るのではなくて、本当にこの地に根付いたというか、文化の薫るそういう街を作っていこうというふうにしているんだと思います。そういった事がもっと発展して、それを発信していけるとすれば素晴らしい岡崎学になるだろうなと思います。資料の1番裏は、岡崎の生んだ明治時代の地理学者ですけれども志賀重昂という人が日本風景論というのを書いていますけれども、その著書の中で自分の生まれた町、岡崎を紹介したものです。これは言ってみれば岡崎学という1番目の郷土史の中の、岡崎が全体の日本史の中でどういった位置を占めたかというような、そういった事に根付いた志賀重昂の書いた物です。また興味がありましたらお読みください。少しいただいた時間を過ぎてしまいました。以上、取り留めない話をして申し訳ありませんでしたけれども、これで今回の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。